２０２２年１０月２日（聖霊降臨後第１７主日、特定２２、C年）

牧師メッセージ

「一粒の愛ある信仰」

（ルカによる福音書17:5-10）

司祭ヨセフ太田信三

主イエスは大きくなることよりも、小さくあることを大事にし、小さな命の営みを慈しまれました。今日の福音書で、使徒たちは「わたしたちの信仰を増してください」と、自分たちの信仰が「大きくなる」ことを求めています。しかし主イエスは、信仰はからし種ほどで十分、その中身が大事だと言われます。

大事なことは、「愛」があるかどうかです。パウロは、コリントの信徒への手紙Ⅰ13：2で「たとえ山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。」と言っています。使徒たちがいくら「大きな」信仰を持っていても、そこに愛がなければ意味がない。愛ある真の信仰ならば、からし種ほどの小ささでも十分だ、と主イエスは使徒たちに伝えたのです。

今日の福音の後半部分では、主人に仕えることは当然のことであり、見返りを求めず、しなければならないことをすることが、クリスチャンには求められていることが記されています。しかし、ルカによる福音書 12:37 には全く逆の記述があります。「はっきり言っておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。」この矛盾したような記述が何故あるかと考えると、やはりクリスチャンの働きとは、主人である神からの愛への応答なのだ、ということです。まず神がわたしたちを迎え、もてなし、給仕してくださる。その深い愛を感じるからこそ、わたしたちは感謝と喜びのうちに神に仕えて生きる心が与えられます。その愛が究極的に示された出来事こそ、十字架の死と復活です。主イエス自らが十字架上でもっとも弱く、小さくされた存在として命をささげてくださった。そのたった一つの命を神は復活させた。ここに、たった一つの命へ注がれる神の大きな愛が示されました。そして、そこに示された大きな愛を知ることでこそ、わたしたちの内にも小さな命を慈しむ心が与えられます。愛ある信仰とは、主イエスを通して示された神の大きな愛をいただくからこそ、わたしたちに宿るのです。

主イエスの十字架と復活という、たった一つの命がすべての命の救いの源となった出来事こそ、からし種一つの愛ある信仰さえあれば、そこに神からの大きな力が注がれることを証ししています。大きなものに気を奪われ、小さなものへの眼差しを失うことがないように。からし種ほどで十分。神の愛の欠片をいただき、愛ある信仰を持って生きることができますように。